



TITLE:

大東亞戦争と経済建設

AUTHOR(S):

神戸, 正雄

CITATION:

神戸, 正雄. 大東亞戦争と経済建設. 経済論叢 1942, 54(3): 300-311

ISSUE DATE:

1942-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/131655>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經 濟 論 叢

號三第 卷四十五第

月三年七十和昭

論 叢

資本主義的論理續論……………

經濟學博士 柴田敬

ナチス社會保險の經營原理……………

經濟學士 中川與之助

金本位の廢棄と支拂準備……………

經濟學士 中谷實

錢莊業の機構……………

經濟學士 德永清行

時 論

大東亞戰爭と經濟建設……………

法學博士 神戸正雄

研 究

日本綿業確立期に於ける貿易政策……………

經濟學士 松井清

佛領印度支那貿易の性格……………

經濟學士 河野健二

岩瀨忠震の開國交易思想……………

經濟學士 松木順

說 苑

李孤帆著「招商局三大案」……………

經濟學士 鈴木總一郎

附 錄

彙報・外國雜誌論題

時 論

大東亞戰爭と經濟建設

神戸 正雄

皇紀二千六百年十二月八日に於ける大東亞戰の勃發は、實に皇國隆興の新紀元であり、世界の新しい時代の黎明を告ぐるものでもあつた。之に依りて凡ての國民が感激し感憤したのであつた。そして緒戰の戰果が洵に赫々たるものではあつたが、此戰の規模が餘りにも大であり、相手が資源の豊富を誇る米英なのであるから、此戰が長期戰となるべきことを覺悟しなくてはならず、其成功には國民の大なる努力に待つべきものがあり、特に此戰爭の遂行と並行して經濟建設の大業をも行はなければならぬ。仍つて此に其經濟建設につき説かうと思ふが、之を説くの前に此戰の原因及結果についても一應解説する。

一 大東亞戰爭の原因

此戰の原因は之を我方よりと、米英側よりとに求めることを得る。

(A) 我邦の側から見れば

(い)近因——はいふまでもなく最近に於ける日米交渉の不調にあるとして良い。我國が謙讓の態度にて隱忍して交渉を續け來つたに拘らず、彼が之に對して毫も讓る所なく、遂に我に向つて、支那及佛印よりの全部撤兵、蔣政權以外の支那政權不認容、三國條約の死文化といふが如き、日本國民として到底忍び難き要請を爲し來つたことは、即ち我をして此戰を敢てせざるを得ざらしめたものである。

(ろ)助因——之が助因としては、我方に於て此戰を敢てするだけの餘力を備へて居るといふことについての自信を數へなければならぬ。即ち我邦は支那事變に於て四年半を費し其爲めに疲れたりとはいへ、此間に養ひ來つた戰爭に於ける實き經驗があり、事變費によりて蓄積し來つた軍需物資があつたのである。尙ほ其外に、此支那事變にては未だ使はれて居らぬ所の、そして長き年月の間、猛訓練して待機して居つた海軍の精銳なる將士があつたのである。之あればこそ、米國側の無理難題には憤然立つて對抗し得るやうになつたのである。

(は)遠因——といふべきものは、米英が我國に對して今日までの長い間に採り來つた不遜非道なる態度に對する我國國民の感情の破裂、即ち我國國民が之に對して堪忍袋の緒を切らしたものと云ふことを得る。詳しくは日米、日英交渉史に讓るべきである。今之を要約していへば、我れと米國と初めての交渉のあつたペルリの來航にも日本征壓の野心が潜みたりといふこともあるが、最も露骨となつたのは日露戰爭の終頃からであり、ハリマンの滿鐵横取の陰謀、日本人學童排斥の問題、つゞいて日本人移民の排斥制限となり、かくして日本人の米國への發展を制限しつゝ、支那への米人の發展には門戸開放、機會均等を主張して日本の支那に於ける發展を抑制し、日本海軍の縮少を強要し、支那事變中には斷へず我方の作戰を妨害し、數々の抗議を提出し、パネー號事件については賠償まで支拂はせ、遂には通商條約を廢棄し、更には貿易を止め資産凍結を行ふに至つては、既に武力に依ら

ざる戰爭を挑んで來て居つたのである。英國に至りては一時は日英同盟まで結んだ仲であり、其誼によりて我方より進んで第一次世界戰爭にて英國側に附いて戰に参加したほどであつたが、戰が済んだ後には、彼は最早好意の片鱗も示さず、戰勝の結果を我方に與ることを惜しみ、滿洲事變後には日本に不利なるリットン報告を作り、支那事變中にも事毎に我方の邪魔を敢てし、そして最近になつては米國の尻馬に乗つて日本への經濟壓迫を行ひ、そして彼の殖民地が日本移民を排斥して居ることは米國と同じである。かゝる國に對しては日本國民としては誰一人、憤慨しない者はないのである。たゞ今日まで之を隱忍し續けたまでである。其長い間の憤激が今日漸く破裂したのである。

(に)眞因——以上にいふ所は、一應の説明である。併しむしろ皮相的な原因である。もつと突き込んで考へるときに、此戰爭の眞の原因は次の如きものである。

(1)我國肇國の大理想たる、萬邦をして處を得しむる爲めに、從來の米英の帝國主義的なる世界（隨つて東亞をも）制覇を打破することが必要であり、之が爲めに我國が斷然起たなければならなかつたのである。

(2)日本自らの爲めを計る上からも

(a)目前の支那事變を處理する爲めにも、其當の相手たる蔣政權を後援する所の米英を打倒しなくては、本當の解決が出來ないといふことを認識して、思ひ切つて對米英戰を初めたのである。

(b)支那事變の末段に至つて結成された所の軍事乃至經濟上に於ける米英支蘭(A・B・C・D)包圍陣、及其に於ける我國への經濟壓迫(貿易禁止、資産凍結)を打破しなければ、我國は死滅の外ない。だからして之を打破し、更に積極的に東亞共榮圈を確立し建設して我邦の自存自立の道を開くべく、決然立つたのである。大東亞

戰爭の眞因は其處にあるのであり、大東亞戰爭の意義も亦其處にあるのである。

(B)米國側から見れば、我國の此度の戰の相手は英米蘭ではあるが、英、蘭は米國の尻馬に乗つて來たもの外ならぬ。最後まで強く我に交渉し來つたのは米國である。米國こそは彼等の陣營の指導者である。そして彼は我國の發展を喜ばず、我國が大陸へ進出することを好まず、飽迄、日本が大陸より後退することを欲して、我に挑戦し來つたのである。然らば何の爲めに之を取てしたか。

(3)眞因

(1)彼の軍需として必要な物資にして西南太平洋、乃至、東南亞細亞に依存するもの(ゴム、錫、タンゲステン、キナ等々)を確保し、自ら之を自由に支配したいといふ欲望が第一である。

(2)支那を其勢力下に置きたいといふ希望が第二である。支那は今日ではまだ米國に取りて大した經濟價值を有たないけれども、其洪大なる地域と、稠密なる人口と、其に埋藏されたる未開發の資源とが、將來に於て米國にとりて重要なものと見透しから、米國は此處に執着して居るのである。

(3)尙ほ、彼の領土フイリツピンが此地域にあることも、此方面への關心を厚からしめる。

(4)助因——米國が日本へ難題を持ちかけたのは、實は日本の力(經濟力、軍事力)の過小評價にもよるのである。洵に統計數字に現はれた處では、到底、日本の力は米國、或はA B C D陣營の力に及ばない。しかし日本には此數字に現はれざる精神力、訓練の結果があるのである。彼は之を見逃したのである。

二 大東亞戰爭の結果

大東亞戰爭の原因は上にいふ如くである。其結果は何うか。此は此戦争がまだ進行中であるので、今、其をば盡くすことは尙早である。だから遠き將來に生ずべきものは今に於て之をいふことを差控へる。たゞ差當つて判明した分だけを茲に述べる。

(A) 經濟上からいふと、

(い) 日本側にとりては、今日まで日本に不足を感じつゝあつた物資、特に軍需必要品、例之、石油、鐵礦等を容易に我方に收めることが出来るやうになつた。そして東南亞細亞、西南太平洋に於ける敵性國家の資産及企業を我手に收めることも出来た。

(ろ) 米英側にとりては、我方を經濟封鎖せんとして、却つて我方から逆封鎖されることになり、彼等が西南太平洋から得やうとした物資を入手することが出来なくなり、且つ彼等が此地域及支那に是迄持つて居た資産及企業を凍結されることになつた。

(B) 軍事上には

(い) 米英側は、東亞、西南太平洋に於ける作戰基地を覆滅され、彼等の企てたる東亞進攻作戰を水泡に歸せしめた。

(ろ) 日本側にとりて、作戰上有利となつたことはいふまでもない。

(は) 友邦、獨、伊にとりても作戰を有利ならしめたことは是れ亦た明かである。

(C) 政治上には

(い) 米英側にて、其國內の人心に動搖を生じ、士氣を阻喪させたことは確かであり、其上、英國の印度統治を

困難ならしめ、濠洲等殖民地の英國に對する關係を弛解したことも争はれない。米國にとりては其の南米への制壓力が弛んだことも見逃せない。

(ろ)日本側にとりては、國民の氣分を一新し、明朗とした。友邦及東亞民族からしての信頼をも厚からしめた。は獨、伊、泰、支、滿等の友邦にも精神的に明朗ならしめたこと勿論であり、蔣政權側に立つ支那人とても内心日本側に傾くものが多くなつたであらう。

三 大東亞戦争の遂行

(A)遂行の必要——既に一旦、此戦争を初めた以上は、眞に米英が大東亞、西南太平洋から撤退するまでは、そして我方の爲めの大東亞共榮圈の確立するまでは、斷じて之を中止してはならぬ。之をば戦ひ抜かなければならぬのである。途中で相手から甘い事をいはれたからとて、之に乗つてはならぬ。此に乗ぜられたら、折角の大業は挫折してしまうであらう。

(B)遂行の困難——併し相手國は富強を誇つて居る米、英だから、彼等が段々と準備を整へて来るに於て、其勢を盛り返へし来るでもあらうし、彼等は緒戦の失敗をば持久戦で補ふつもりだといふても居るから、之に對して我方とても用意を怠つてはならない。此については勿論頼るべきは自力あるのみだが、しかし遠い處には獨、伊などの友邦もあり、近い處に滿洲國、支那(の少くとも一部)、泰國、佛印などの友邦もあり、マレー、フィリッピン、ビルマ、ボルネオ、等々新しい地域の協力もあるのだから、我方にも持久戦に於て都合の良いものがないではない。

(C)遂行の方法——此戰爭を戦ひ抜くには如何にするか。戰爭の直接の仕事は軍當局の指導に従ふとして、國民としては

(い)精神的には——必勝不敗の信念を堅持して、困苦缺乏に堪ゆる態度にて進むべきであり、

(ろ)物質上からいへば——一方、生産方面では、軍需品と、國民生活必需品と、共榮圈内の住民の需要品との生産を擴充し充實し、他方、消費の方面にては、消費規正、生活合理化、其一段の低下を計り、以て、租税と獻金とを供出し、出来るだけ多大なる貯蓄を行ふて、其にて公債と、生産力擴充資金とに應じるやうにしなければならない。

四 大東亞共榮圈の確立

我々は此際、飽迄、戰爭を戦ひ抜かなくてはならない。併し單に其の戰を遂行するだけで足るのではない。之と並行して、大東亞共榮圈建設の事業をも行はなければならない。そして其は單なる經濟上の事業たるのみでなく、やがて戰爭の遂行に必要な軍事力の充實ともなる。所謂、國防國家の完成にも役立つ。即ち一方に戰爭しつつ、同時に共榮圈確立といふ建設事業を行ひ、其資材を獲得して國防力を充實し併せて經濟力を擴大しなければならぬ。斯くして我が國の軍事力及經濟力を伸ばすが、他方、更に我國の文化をも向上して、其の有つ文化を共榮圈内に普及しなければならぬ。

(A)共榮圈確立の必要——此建設事業は(1)戰爭遂行の爲めに、(2)我國民の生存及發展の爲めにも、更に(3)共榮圈の經濟を發展せしめるのにも必要である。

(B) 共榮圈の地域——としては、今日までに既に日、滿、支、次ぎに泰、佛印が之に入り、マレー、フィリッピン、ボルネオ、ビルマ、蘭印が段々之に入りつゝある。やがて濠洲、印度まで加はることもあり得る。

(C) 共榮圈確立の方法——が一の大な問題である。此は應急措置と恒久的の施設とから講究しなければならぬのである。

(い) 應急施爲——としては、政府が此議會で聲明したる南方開發四原則に大體示されたものを舉ぐべきである。が尙ほ之と共に行はなければならぬものもある。

政府の聲明したる四原則は、(1) 資源の獲得、特に戰爭遂行上緊要なる資源の確保、(2) 南方資源の敵性國家への流出阻止、(3) 作戰軍の現地自活確保、(4) 在來企業の我方への協力誘導である。

(1) 右の第一及第三原則は、つまり其物資をば我方の爲めの戰爭遂行用及其他の用の爲めに確保するといふのである。此は此戰爭遂行及共榮圈確立事業を達成する爲めには當然の要求である。そして此資源の中には、(1) 米英蘭人等に屬する限りは敵産として我方の自由に管理することの出来るものもあらうが、(2) 其他の物を我方にて利用するについては對價を拂はなければならぬ。此に對して一時的には我方の軍票を渡せば足るのだけれども、其には結局、或度まで我が物資の裏付けが必要であり、やがて、其の南方にて不足し需要する日本物資（即ち綿製品、人絹、金物、藥品、雜貨等）を供給することゝならなければならぬ。

(2) 第二原則は、此も戰爭中には必要であり、相手を屈服させるのには、是非、此が必要である。併し斯くして其物資を敵性國に渡さぬとすれば、其處に過剩物資が生じ、其處分方法が問題である。其れには(1) 現に出來て居る物、出來つゝある物の一部は、勿論、現地にて又は内地に持來つて我方の軍民の爲めに利用し得るし、(2)

現地にて又は内地へ持來つて蓄積することも出来る。(3) 一部は友邦たる獨・伊へ分配もし得るが、此はまだ當分の間は出来ない。(4) 併し其れだけでは尙ほ不十分である。結局、生産制限を行ひ、補助方法を講じ又は自發的に利益打算の上から他の生産へ向はしめる外はない。鑛物資源は單なる生産制限とする外ないが、農林産物は他の物へ轉換させることが出来る。例之、フィリッピンの砂糖は棉花へ、マニラ麻は他の種類の麻へ、佛印、泰のゴムも一部は棉花へ轉換しめることが出来る。

(3) 第四原則については、南方華僑の協力工作が必要となる。邦人企業については、從來此方へ發展しつゝあつた邦人をして之に従事せしめる。外に經驗と能力とのある邦人にも之を許し、邦人は主としては企業者、指導者として發展せしめ、勞働者としては成るべく控へる。内地からの邦人渡航を嚴選する。之に附帶して内地よりの爲替送金を當分遮斷し、現地企業には南方開發金庫によりて助成するといふのである。

(4) 其他にては、輸出入のことは政府管理とする。實際の仕事は民間商社に扱はせても、名義は政府が向ふの物を買取つて内地に持來り、内地の物は政府が買取つて現地に送るといふのであり、此の如き事も戰爭遂行中には止むを得ぬが、やがては變更されるであらう。通貨は現地通貨にて表示する軍票に依るといふが、此もやがては、日本圓を基準とする圓系通貨に導くべきものであらう。

(5) 恒久的施設——としては、此はやがて東亞共榮圈内の國土計畫を立て、之を行ふことに歸する。其計畫は勿論、日本を中心として、併し共榮圈内の諸友邦及外地のことも考慮して之を定める。即ち八紘爲宇の精神によりて考慮する。其をば經濟上の見地のみでなく、國防、文化など凡べての觀點を綜合して考慮する。そして之を自然的發展にのみ任せず、高所よりしての計畫によりて統制を行ふこととなるべきものである。

(1) 共榮國內諸地域の間にては

(a) 原則としては、經濟上の見地から、産業は凡べて適地適業による。各地にて比較的適したものを營む。其處で、工業としては、自ら高級工業、精巧工業、重工業、化學工業が日本に行はれることになり、低級工業、粗工業、織緯工業、雜工業が各地域にも行渡ることになるであらう。

(b) 右原則は左の諸點から斟酌を加へられる。

(イ) 特に軍事上の見地から、軍需品工業の重點は日本内地に置く。補助的のものは友邦、外地にも置くこととなる。

(ロ) 生活及社會安定の見地から、主食料品は各地域に相當度に生産されるやうにし、不時の場合の爲めの相當蓄積をも保持する。從來食料不足なりし地域には一層、食料増産に力を用ゆる。

(ハ) 戦争及天災に依る危険の分散といふ見地から、各種産業は出来るだけ一地域に集中しないやうにし、數多の地域に分存せしめるやう導く。

(ニ) 社會不安を防ぐ爲めに、適地適業への進行をば漸進主義によりて行ふ。激變を避くる。

(2) 日本内地にて

(a) 工業

(イ) 工業につきては禁止地域を定める。既に過度に密集したる東京、大阪、名古屋、北九州の四地域は現在以上に工業の發展することを止める。其中心より一定距離の地域には工場新設を禁ずる。此は戦争及天災の危険の分散、交通混雜の防止、密集生活の匡正の爲めに要請せられる。

(ロ) 其より一定相當距離以上の處は、自由地域として、企業者の打算から、其々の處に自然に適當したる事業を起らしめる。其でも防空上便なる處、原料、動力の豊かなる處の如きが自ら、一層多く選まれやう。

(ハ) 前記二の地域の中間の地域は凡て許可地域として、過度密集とならぬ度を見計つて新設を許す。

(ニ) 別に助成地域を設くるのも一案である。しかし人爲的に助成するよりも、自然の發展に任かすが適當である。但し自由地域内の發展の模様を見て、其處に不都合を認めるに至るときは、隨時、制限を加ふる必要が生ずるであらう。

(b) 農業

(イ) 食料だけは出来るだけ多く内地にて充たし得るやうにし、外地友邦に待つものをば少くする。其外地友邦に待つものについても、或地域に偏せず、諸多の地域より供給されるやうに計畫する。

(ロ) 内地にては各地域(府縣よりも大な地域を定める)別にても、出来るだけ自給し得る計畫を立てる。各地域にて相當の蓄積をも備へる。

(ハ) 食料につき特に増産計畫を立てる。奢侈的の作物を制限する。都市附近には蔬菜生産地域を設ける。

(ニ) 農民を出来るだけ農村に止め、純農村を保持するに努める。滿洲への土着農業移民は助成しつつ、遂る。南方移民も必要であり、やがて此への大量移民の必要を生ずると思はれるが、内地に於ける純農村維持と並行して行ふのは特段なる考慮、工夫を要する。

五 文化向上の努力

前述したのは結局、大東亞共榮圈確立の計畫及施設であるが、其はつまり我國の軍力、經濟力を充實し、所謂國防國家の完成と經濟國家の完成といふことになるが、其のみでは眞に共榮圈内の住民を信賴せしめて、之が永續を保つことがむづかしい。別に文化、就中、徳性文化を向上せしめることが必要で、即ち飽迄、萬邦をして其處を得しめるといふ精神を徹底し、日本國民が原住民を搾取することなく、自らの生活を飽迄も簡素にし、華奢に陥らぬ用心が肝要である。日本が米英の驕奢生活を學び、其轍を踏まぬやう用心すべきである。奢侈は戰鬪精神を失はしめる。文化には勿論、精神文化、物質文化があるが、そして物質文化の進歩も固より必要であるけれども、日本固有の精神文化の發揚にも力を用ゐなければならぬ。そして此文化の向上は、やがて我が國防力の充實にも、經濟力の増強にも役立つことは多辯の要なき所である。